

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 423 回 こんなリーダーは、今、いずこ？

2011.6.12

リーダーたる資質は何だったのだろうか？最近の政治、経営、教育、言論界等、色々な分野で人を導く人達の「リーダー像」が、大きく変わってしまったような気がしてならない。「武士道」とまでは言わない、でも、少なくとも我々世代が求め、望み、羨望の眼で見っていたリーダー像は、こんなタイプではなかったと思ったりしている。

古今の偉大なる先人達が、貴重な言葉を残している。今もう一度、思い出してみよう。こんなリーダーでどうする、そして自分自身はどうか？素直に読み返してみた。

「すべての経営者の人間的資質を測る「ものさし」は、喜んで自己犠牲を払う用意があるかどうかにある」とは、京セラ・第二電電（現・KDDI）創業者の稲盛和夫氏の言葉である。ご存知の通り稲森さんは現在も活躍中、本人の実際はどうだかわからないが良い思想である。確かに昔のリーダーは、自己犠牲を覚悟して、経営に挑んでいた。

そして自らが、燃えるような情熱をもち、率先して動くことを常とした。その情熱は燃え移る。だから、自分が火種になる。やがて**「指導者はロウソクの火、周りを明るく照らす**
が、自分の身を減らし、燃えつくす」（城山三郎）

この壮絶な現象をむしろ誇りとし、リーダーの使命としてきた。

「常に深く、熱く求むべし、道は自ら開かれん。仕事に情熱を持とうと思ったら、情熱を込めた活動をせよ！」（小泉信三）をモットーとし、「**やってみせ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ。話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず**」（山本五十六）、これがリーダーの行動原則だった。

この精神と行動を支えるのはリーダーたる資質、つまり**「思想の深遠なるは哲学者のごとく、心術の高尚正直なるは元禄武士のごとくして、これに加うるに小俗吏の才をもってし、これに加うるに土百姓の身体をもってして、はじめて実業社会の大人たるべし」**（福沢諭吉）であり、幅広い見識と高い教養を身につけ、決して奢（おご）らず、万民の気持ちを理解する思い遣りと優しさを有することだと教えられた。

よほど偉い人でも**「実るほど、頭を垂れる、稲穂かな」**（作者不明）、こんなしぐさを目の前で見せられたら、もう、かなわない。「**人生は、ニコニコ顔で、命懸け**」（平澤興）、決して愚痴を言わず、もちろん人の悪口は聞いたことがない。どんな苦勞があろうとも顔に出さず、笑顔で平等に接してくれる。「**武士は食わねど高楊子**」（作者不明）、先ず手柄は部下に...こんなリーダーであればこそ、「何といっても彼について行こう！」と思えるのかもしれない。

「将の条件というのは、人がついてくるといことです」（城山三郎）とすれば、「将」たるもの**「リーダーの眼目は、部下の魂に火をつけて、その全人格を導くことにある」**（森信三）の言葉通り、やはり命懸けの、コミュニケーションが出来る人が条件となるに違いない。

人間「楽」や「略」をしだしたら、どうしてもその方向を求めてしまう。だからあえて、自分で自分をそうでない環境へ導くしかない、特にリーダーは！みんな、あなたの背中を見ているから、自分自身を自制・自戒し続ける一生かもしれない。